

連載

NIA 吉村会長の Coffee Break

国連職員として世界中を旅してきた吉村和就会長が、日本人の知らない海外事情をウィットとユーモアを交えて綴るコラムです。

第6回 イラン・イスラム共和国と日本・その2

2015年11月、首都テヘランでUNESCO—イラン政府共催の「水会議」で講演した後、前から行きたかった古都・イスファハーン（新市街のイマーム広場は世界遺産に登録）に向かうことにし空港に到着した。国内線ターミナルは英語の表記が無くすべてペルシャ語、妻と二人で途方にくれているとイラン人の男性が英語で登場口まで案内してくれ、さらに登機時間には「あの飛行機に乗ってください」と、最後まで親切にしてくれた。テヘランから約340キロ南のイスファハーンまでのフライト時間は約1時間半であったが、窓からの景色は「すべて砂漠で、緑が無い世界」（国土の9割以上は砂漠地帯）だった。

1. 世界遺産を有するイスファハーン

イスファハーンは、ザーヤンデ川の豊かな水資源により「アッバース1世」が帝都に定め、シルクロードの交易路の要所として栄えた。特に16世紀に建造された「イマーム広場」は世界遺産に登録され、世界中から多くの観光客を引き寄せている。その魅力はモスクや宮殿に見られる精緻なアラベスク模様の装飾タイルが素晴らしく、見ていると吸い込まれそうな建造物である。広場の横には「バザール」があり、歴史的な手織りペルシャ絨毯や更紗（サラサ）の店、手工芸品、スパイス店などが並んでいる。歩き疲れたらチャイ（紅茶）が喉の渇きを癒してくれる。

古都イスファハーンの中心部を横断す

るザーヤンデ川はペルシャ語で「母なる川」を意味し、全長400キロもあるイラン中部で最大の川であるが、地球温暖化の影響により、干ばつ被害で川が干上がる現象が頻発している。

2. 顔の平たい民族

私たちのホテルは川の向こう側にあり、何処に行くにもザーヤンデ川に架かるシオセ橋を往復しなければならなかった。イランはお酒も娯楽も禁止なので家族でピクニックを楽しみ、若者達は橋の欄干に腰掛けて楽しくお喋りするのが唯一の楽しみらしい。そんな中、私たちが橋を渡る時、一瞬、彼らのお喋りが止み、鼻が高く彫りの深い大きな目の集団が不思議そうに我々の顔をジーと見ている視線を感じた。それは映画にもなった「テルマエ・ロマエ」のルシウスの台詞で「顔の平たい民族（日本人）」を初めて見たからに違いない。公園でも同じだった、ベンチに座っていた地元の人々が「顔の平たい民族」を珍しそうに見ていた。街歩きで疲れたので、マックみたいな店があったので、二人でペルシャ語の看板を見ていると地元の高校生が英語で話しかけてきた。対応していると高校生が次々と集まり色々質問された。高校生は英語の勉強をしているが、外国人と話す機会がないので、最高のチャンスだったらしい。

親切な高校生はメニューを説明しオーダーの仕方まで教えてくれた、「ありがとう」はペルシャ語で「メルスイ」フランス語と同じだ。

欧米諸国から「悪の温床」ともプロパガンダされているイランだが、私たちが接した現地のイラン人はとても親切で礼儀正しい。情報過多の時代、私たちは与えられた情報を鵜呑みにするのではなく、自ら足を運び、現地で確認することの重要性を感じたイランの旅であった。

市民の憩いの場・セシオ橋



枯れたザーヤンデ川 川床が歩行者通路に(2008年)

